

論文審査の結果の要旨

報告番号	博(生)甲第279号	氏名	呉 鵬
学位審査委員		主査 連 清吉 副査 佐久間正 副査 谷村賢治	
<p>論文審査の結果の要旨</p> <p>呉鵬氏は、2009年4月に長崎大学大学院生産科学研究科博士後期課程に進学し、現在に至っている。同氏は、生産科学研究科に進学以降、環境科学を専攻して所定の単位を修得するとともに、日本近代の中国学に関する研究に従事し、その成果を2011年12月に主論文「京都中国学派の『論語』研究」として完成させ、参考論文として、学位論文の印刷公表論文4編（うち審査付き論文3編）、その他の論文2編（うち審査付き論文1編）を付して、博士（学術）の学位の申請をした。長崎大学大学院生産科学研究科教授会は、2011年12月21日の定例教授会において論文内容等を検討し、本論文を受理して差し支えないものと認め、上記の審査委員を選定した。委員は主査を中心に論文内容について慎重に審議し、公開論文発表会を実施するとともに、最終試験を行い、論文審査および最終試験の結果を2012年2月15日の生産科学研究科教授会に報告した。</p> <p>本研究は、狩野直喜をはじめ、武内義雄、吉川幸次郎、貝塚茂樹、宮崎市定4人、いわゆる京都中国学研究者の『論語』に関する論攷を解析し、それぞれの特質を究め、その関連性を見出したうえで、京都中国学派における『論語』研究の系譜を構築して、日本の『論語』研究史における位置を究明した。</p> <p>京都中国学の人々の『論語』に関する論攷は、おおよそ伝統学術の成果を批判的継承しながら、その独創性を展開された秀作だと言えるであろう。狩野直喜は、江戸古学派と清朝考証学の学説を継承しながらも、古学派の護教主義から脱却し、諸説を旁搜博引して、その明確な論断は清朝の学者より優れた創見があった。武内義雄は、古学派と清儒の原典批判の成果を継承したうえで、『論語』の源流と系統を明らかにした。当時の学界において、その結論は、全く新しいものであって、大きな独創性を有するものである。吉川幸次郎は、『論語』の文学性を力説し、その『論語』の文章の「リズム」などの論説は、従来や同時代の他の学者の著述には稀に見ず優れたものである。貝塚茂樹は、「新釈古」の基礎とする出土文物の考証及び甲骨文、金文などの古文字の解読によって『論語』の文献に残された古史再建の問題を解決した。宮崎市定は、『論語』の研究史から中国経学史及び孔子地位の変遷史を捉える歴史学者の独特の古典研究方法も、従来や同時代の論考に見られない独創的</p>			

な見解である。

以上のように本論文は、京都東洋学の百年の研究業績を踏まえ、江戸（1603－1866）儒学の中心である『論語』を取り上げ、狩野直喜ら京都中国学研究者はいかに近世の学問成果を批判的継承しながら、清朝考証学や西欧の近代の実証主義の方法論を参考して、中国の伝統的学問論、いわゆる経典化とされた絶対的存在である『論語』を文献批判の作業を行い、『論語』の成立経緯を明らかにする。さらに『論語』の思想内容、文学芸術と経典とされる所以を究明する。こうした一連の論考することによって、京都中国学における『論語』研究の系譜および日本近代中国学の真髓を発明するのである。なかんずく京都中国学の人々の『論語』研究に関する方法論的「新釈古」や「新研究」などの論攷は前人未発の析理であり、その最も精力を傾注して学識を見せる真骨頂である。その成果は日本における『論語』研究史に多大の寄与をするものと評価できる。

学位審査委員会は、日本近代中国学の分野において極めて有益な成果を得るとともに、古典文献学の研究の進歩発展に貢献するところが大きく、博士（学術）の学位に値するものとして合格と判定した。